

弓道具の歴史

●狩猟の道具から武器へ

弓具の起源は大変古く、一般には旧石器時代末期には存在していたといわれています。新石器時代には、世界の古代文化に共通してみられます。

日本では、古代漁猟を中心とした生活であったため、弓具の使用は、まずこの漁猟からはじまりました。しかし、次第に他民族との接触が多くなり、争う機会も出てくると、弓具は自分や種族を守るための武器としても使われました。

奈良時代（七一〇〜七九四）になると我が国最初の歴史書である「日本書紀」に記されているように、弓具は武器の中でも權威や

はこの時代に完成されました。

室町時代（一三三八〜一五七三）に入ると、弓を射る技術が発達し、優秀な射手が多く輩出され、その人たちにより各流派が形成されていきました。主なものとしては、弓馬礼法の中心的存在であった小笠原流が、足利将軍家の師範として迎えられました。

また一方では実戦的な歩射射術を得意とする日置流が、下級武士などの間に広く浸透していきました。天文十二年（一五四三）に鉄砲が伝来すると、弓具は戦闘武器としての実用的価値は失われていきました。

江戸時代（一六〇三〜一八六七）に入ると、弓術は実戦的性格を失い、一般には武士の心身鍛練の方法として行われました。また、耐久競技である通し矢は江戸時代初期から中期にかけて全盛を極め、天下第一を争う射手に人々の関心が集まりました。この通し矢によって、ゆがけ（一七〇頁参照）もさらに

武力を象徴するものとして尊ばれ、このため宮中や武家の大切な儀式の通りに、弓を使った儀式が特に重視されました。

平安時代（七九四〜一一九二）に入ると、中国文化の影響が弓具にもおよび、木と竹を合成した弓などいろいろな改良が行われました。またこの時代から馬を利用することが盛んとなり、馬に乗りながら弓を射るため、戦闘武器としての重要性が増していきました。

●武士の心身鍛練の中心に

鎌倉時代（一一九二〜一三三三）になって武士が指導的地位を確立すると、武士は、心身鍛練と武技の鍛練として、弓と馬の修練を第一にかかげました。その中で武士たちは楽しみながら武技を鍛練できるスポーツ的要素をもった、犬追物や流鏑馬などを盛んに行いました。また、この時代は弓具の改良も急速に行われ、今日伝えられる多くの弓具

改良されました。しかし、江戸時代の末期には、記録も頭打ちとなり、新たに普及してきた剣術・柔術・槍術などに取ってかわられ、次第に衰退していきました。

●弓道として定着

明治時代（一八六八〜一九二二）になり、政府が欧化主義を積極的に進めたため、弓術はほとんど姿を消し、わずかに宮内庁と警察と学校の一部で細々と行われていました。明治五年（一八七二）に学校教育制度が制定された頃から弓術は弓道と呼ばれるようになりました。明治時代中期になると、日本的な伝統への復古の機運が高まり、明治二十八年に諸武道を組織した大日本武徳会が設立されると、弓道も再び奨励されるようになりました。

大正時代（一九一二〜一九二六）以降は、学校のクラブ活動として、また昭和九年には